

神戸女子大学古典芸能研究センター令和五(二〇二三)年展示

念仏往生

— 歓喜と報謝の表現 —

展示図録

期間…二〇二三年九月二十五日(月)～十一月三十日(木)

午前十時～午後五時 土・日・祝日休室

場所…神戸女子大学古典芸能研究センター展示室

(神戸市中央区中山手通2丁目23-1 神戸女子大学教育センター2階)

背景…空也上人肖像(志水文庫蔵『空也上人絵詞伝』より)

古典芸能研究センターでは、9月25日より「念仏と芸能」と題して全6回の特別講座を開講します。これに合わせて、展示室において、念仏や芸能に係わる資料の展示を行います。

一心に仏の名前“阿弥陀仏、を念じたり唱えたりすれば、誰もが極楽浄土に行けるという「念仏往生」の思想は、中世以降、多くの人々に支持され、芸能文化にも大きな影響を与えました。今回は、特別講座の中でとりあげる能・浄瑠璃・歌舞伎などの台本類や上演関係資料、また、民俗芸能として伝承されている念仏踊りの写真など、さまざまなジャンルの資料を紹介します。

「念仏」と念仏往生

「念仏」とは

阿弥陀仏を「念じる」ことをいう。仏の実相を観ずる^{ほっしん}法身念仏、仏の功德や相好を思い浮かべる^{かんそう}観想念仏、仏の名を口に称える^{しょうみょう}称名念仏などがある。日本では当初は観想念仏が中心だったが、10世紀頃から称名念仏が盛んとなり、主流を占めるようになった。これが浄土教の根幹となり、念仏といえば一般的に「南無阿弥陀仏」などの^{みょうごう}仏の名号を口に称えることをさすようになった。そうした中で、歡喜の心を身振りや具体的に動作で表す「踊り念仏」が生まれてくる。

他方で、民俗社会では早くから、念仏には追善・滅罪や死霊鎮魂の機能があるとされ、臨終や葬送、追善の仏事、彼岸や盆の行事などに用いられた。また芸能化した民俗念仏が各地に伝わっている。

「^{しょうみょう}称名念仏」をめぐる人物

円仁：平安時代初期に活動した天台宗の僧・慈覚大師円仁は、五台山竹林寺の念仏を日本に伝えた。これは独特の声明による称名念仏で、日本の称名念仏の源泉となった。

空也：観想を伴わず、ひたすら「南無阿弥陀仏」と口で称える称名念仏を日本において記録上初めて実践したのは、10世紀平安中期に活動した空也であるとされる。

源信：空也から一世代遅れて10世紀末から11世紀初頭の平安後期に活動した天台宗の僧・恵心僧都源信は、日本の浄土教の祖と称され、法然や親鸞に大きな影響を与えた。

良忍：称名念仏の流れは、平安時代末期に、融通念仏の祖の良忍に受け継がれた。その後の融通念仏宗では「南無阿弥陀仏」と称え、「大念仏」という。

法然：平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて、「南無阿弥陀仏」をひたすら称える「専修念仏」の教えを説いた。後に法然は、浄土宗の開祖と定められる。

親鸞：法然の本願念仏の教えを受け継ぐ。親鸞は名号を阿弥陀仏からの呼びかけと考え、これに信じ順う心により往生が定まると説いた。後に、浄土真宗の宗祖とされた。

一遍：法然の高弟である証空しょうくうの法系（西山義）を学び、後に時宗を開いた一遍は、賦算（※念仏札を配ること）と踊念仏を行いながら諸国を遊行した。

「念仏往生」とは

仏の名号を念じて、浄土（＝仏の世界、仏の国土）に往生することをいう。さまざまな行を修して（＝修行をして）往生する「諸行往生」の対とされる。

仏教には多くの仏が登場するが、日本の仏教思想における中心的存在は阿弥陀仏である。したがって、日本では一般的に、「念仏往生」とは阿弥陀念仏を信じて「南無阿弥陀仏」の称名を口で称えて、極楽浄土に往生すること、とされる。極楽浄土（別名「安養国」「安楽国」）は、阿弥陀仏が悟りを開いて仏に成った時にできた国で、西方十万億の浄土を過ぎたところにあるとされている。

念仏往生は『佛説無量寿経』に説かれる阿弥陀仏の第十八願文に基づく教えである。これは、阿弥陀仏が仏になる前の修行時代にたてた誓願四十八の18番目にあたり、最も重要な願とされる。阿弥陀仏に現世で救われて「南無阿弥陀仏」と念仏を称える（称名）身になれば、阿弥陀仏の浄土（極楽浄土）へ往って、阿弥陀仏のもとで諸仏として生まれることができると説かれている。

第十八願文（「念仏往生の願」）

設我得佛 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺 唯除五逆誹謗正法
もし我仏を得たらんに、十方の衆生至心に信樂して、我が国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、
もし生ぜずんば、正覺を取らじ

（意訳：わたしが仏になる時、すべての人々が心から信じて、わたしの国に生まれたいと願い、
わずか十回でも念仏しても生れることができないようなら、わたしは決してさとりを開かない。
ただし、五逆の罪を犯したり、仏の教えを謗るものだけは除かれる。）

源 信（恵心僧都）

平安中期の天台宗の学僧。天慶5年(942)～寛仁元年(1017)。浄土教家として著名で、横川よかわえしん恵心院にあって修行と著述に従事したので、横川僧都、恵心僧都とも称された。

大和国（奈良県）葛城郡当麻郷かつらぎ たえまに生まれる。父は卜部正親うらべまさちか、母は清原氏。伝えによれば、7歳で父と死別、その遺命により出家し、9歳のとき比叡山に入った。

天曆8年(954)13歳のとき得度受戒、良源(慈慧大師)の門下となって経論の研鑽に努め、天延元年(973)に32歳で広学堅義となり、宮中に奉仕する内供奉十禅師に補せられた。天元元年(978)37歳にして『因明論疏 四相違略註釈』を著す。因明とは仏教論理学であり、この著作が今日知られる限りでの源信の処女作なので、この年から彼は学僧として出発したことになる。

寛和元年(985)、代表著作である『往生要集』三巻を撰述する。本書は極楽往生に関する経論の要文を選集し、念仏を勧めたもので、のちの浄土信仰に決定的な方向を与えた。翌年、源信は同書を宋の周文徳に贈り、文徳は天台山国清寺の経蔵に納めたところ、賛仰の的となり、源信の名は中国の仏教界にも知られるに至った。

またこの年より首楞嚴院において、『往生要集』の教説に基づいて念仏三昧を勤修する「二十五三昧会」をはじめめる。(名称は、三昧会が25人の發起衆の呼びかけにより結成されたことによる)。2年後の永延2年(988)には「十二箇条起請」を作って、同志の平生および臨終の作法を定めた。この二十五三昧会につながるものとして、横川の花台院では「迎講」がはじめられ、在俗の念仏者が多く集まり、横川には念仏集団が形成された。

※「迎講」…念仏行者の臨終に際して阿弥陀如来が諸仏とともに極楽より来迎するさまを演ずる法会。来迎会、迎接会、二十五菩薩来迎会、練供養などともいわれる。

長保2年(1000)法橋に叙せられ、寛弘元年(1004)権少僧都に進んだが、翌年辞退した。当時の比叡山の世俗化と墮落の風潮を嫌い、名利を避けて横川に隠栖し、行法と著作に励んだ。『源氏物語』の横川僧都は源信がモデルといわれる。70歳前後から病で起居が不自由であったが、なお念仏を怠らず、寛仁元年(1017)6月、76歳で没した。

門下に覚超、良運、明豪など多くの高僧が出て、一門の教学を恵心流という。

著作は、前記のほか『要法文』三巻(986)、『菩提心義要文』一卷(997)、『大乘対俱舎鈔』一四巻(1005)、『一乘要決』三巻(1006)、『靈山院釈迦堂毎日作法』一卷(1007)、『白骨観』一卷(1011)、『阿弥陀経略記』一卷(1014)など七十余部150巻に及ぶ。

なお、『後拾遺往生伝』平維茂条に記されるように、早くから来迎図の創始者と伝えられており、世に源信作と伝える来迎図は多いが確証はない。しかしながら、来迎図が源信教学の影響を受けて作られたことは明らかだとされている。

『往生要集』について

『往生集』とも。比叡山横川の首楞嚴院に隠遁していた源信が、43歳の永観2年(984)11月から書き始め、翌年4月に完成した念仏往生の入門書で、三巻10章(大文第一～大文第十)からなる。本書は、念仏に対する体系的組織構成を成し遂げた最初の書として、従前の一切の類書を凌駕し、浄土教史上の一大金字塔と評しうるものである。

序では、濁世末代の人にとって、極楽に往生する道を示す教えこそ大切だいう信念から、そのために必要な念仏について經典や論疏のなかから要となる文章を集めたとする。引文は112部、617文に及ぶ。内容は、「厭離穢土」、「欣求浄土」、「極楽証拠」、「正修念仏」、「助念方法」、「別時念仏」、「念仏利益」、「念仏証拠」、「諸行往生」、「問答料簡」の十門(大文)によって説かれ、跋文で執筆の経緯を語る。

本文は、第一の「厭離浄土」を、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天(=六道)と総結の七つに分け、三界六道の厭離すべきことを明かす。特に注目を引くのは、地獄と人道とで、地獄では八熱地獄の一々の構造・大きさ・寿命・業因等に触れ、その極苦の様を如実に活写して恐怖心をかき立て、罪の恐ろしさを思い知らせる。人道では不浄・苦・無常の三相をあげて、人の体の不浄を明かし、人の一生が苦に満ち、

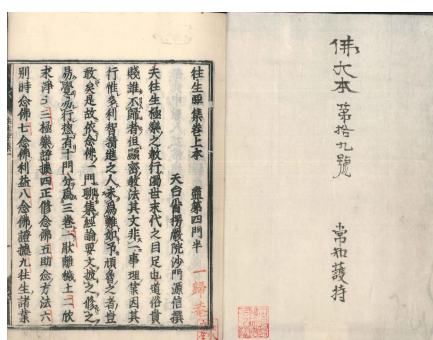
屠所に引かれる牛のようにはかないことを説く。総結ではこれらを踏まえて、穢土には愛執すべきものは何一つないから、いまこそ出離の道を求めて浄土を願わねばならない、と教える。

ついで第二「欣求浄土」では、仏菩薩の来迎をえて極楽に往生する楽しみをはじめ、往生後の楽しみなど、全体を「十楽」に整理し、極楽の教主阿弥陀仏に遇って教えを聴き、思いのまま仏を供養し、仏道に増進する身となることを細説する。

このように、冒頭に壮絶なまでの地獄の様相が綴られ、その直後に、それとは対照的に仏の救いの尊さや恵みの有難さを思い知る浄土の十楽を説くことによって、読み手は浄土への救いを求めたくなる極めて効果的な構成になっている。以後、第四「正修念仏」を中心に、浄土に往生するための念仏の正しいありかたについて、詳細に説かれる。

源信の念仏は観想が中心だが、従来の観想念仏のように極めて高度な能力や資質と精進努力を要するものではなく、^{きみよう} 帰命・^{いんじょう} 引撰・往生の想（救いを願い、仏に導かれて、極楽へ行く）を想う念仏が示される。つまり、一定の恵まれた条件が備わっていないと勤めることができなかつた観想念仏を離れ、一般庶民をも仏の救済に適う対象として含めることになる点が特徴であった。この念仏は各種の修行（諸行）と比較して行いやすく、しかも功德の勝れた行と位置づけられたことの意義も大きかった。さらには大文第六「別事念仏」は、念仏を平生と臨終に分け、その臨終では、音楽性や法要儀礼的な要素を払拭し、死の瞬間に直面した際の念仏について懇切丁寧に説く。その後「迎講」なる臨終来迎を擬した法会について説かれている点も注目される。

また、念仏を最勝の行とはするものの、他の諸行を否定せず、念仏と諸行を並行して実践するという立場も明示している。



1 往生要集（元禄10年刊）



2 往生要集（寛文11年刊）

1 往生要集

刊 大本 三巻3冊 元禄10年(1698)
(京) 西村九郎右衛門・小林莊兵衛・赤井長兵衛
上・中・下巻の3冊構成。漢文で書かれた本来のかたちの書。本文末丁の裏に「元禄十丁丑年／京師書林／東六条下珠数屋町／西村九郎右衛門（以下略）」の刊記があり、さらに裏表紙見返には「(浄土宗／総本山) 書籍調進所／知恩院古門前石橋町／澤田吉左衛門」とある。

志水文庫

2 往生要集

刊 大本 6巻6冊 寛文11年(1671)
現存最古の絵入り本『往生要集』は寛文3年版だが、本書はそれを模刻したと思われる類版本。挿絵は寛文3年版より簡略化されている。6冊本は巻一・巻二の副題を「地獄物語」、巻五・巻六の副題を「極楽物語」とする。(本資料の巻三・四の副題は欠。他本から類推すると「六道物語」。) なお、以下の諸本(展示2～6)の本文は全て同系。

志水文庫

3 和字往生要集

刊 大本 6巻3冊 松會版

古版の仮名書き絵入り往生要集の原刻版。巻一・二「地獄物語」、巻三「鬼道・修羅道・人道」、巻四・五・六「極樂物語」。本書は従来知られておらず、近年紹介された版。6巻すべて揃った松会版としては唯一の現存本。挿絵は寛文3年版を参照して描かれたと思われ、寛文11年版とも類似する。丁付は各巻ごとで終わる。 志水文庫



3 和字往生要集
※掲出箇所は3・4ともに「第一 地獄」の「阿鼻地獄」挿絵



4 忍入 往生要集

4 忍入往生要集

刊 半紙本5巻4冊(巻一欠) 元禄2年(1689) (京) 菱屋治兵衛

寛文版と同系であるが、挿絵はさらに簡略化されている。本資料は巻一欠、巻二「第六 焦熱地獄の事」から。本来は六巻四冊か。巻六(4冊目)に錯簡あり。柱題を巻二は「ぢごく」、巻三巻四は「ようしう」、巻五巻六は「こくらく」。 志水文庫

5 和字絵入往生要集

刊 大本 三巻3冊 天保14年(1843) (京) 風月庄左衛門、ほか4軒

巻上に全巻の目録を付す。刊記の前に「畫工 八田華堂金彦」と記す。丁付は各冊とも1丁から通し。仮名書きの『往生要集』は、寛政2年版(元禄2年版の改刻本)から三巻3冊形態となり、各巻の副題を「地獄物語」「六道物語」「極樂物語」とする。天保版は諸本のうち最も流布した。挿絵は一新され、多くは滋賀聖衆来迎寺本六道絵(十五幅)を参照して描かれている。挿絵の絵師八田華堂金彦は滋賀近江の人という。 志水文庫



5 和字絵入往生要集



6 平かな絵入往生要集

※掲出箇所は展示5・6ともに、極樂の様子を詳しく描く箇所「第四 ごみょうきょうがい 五妙境界之樂」の挿絵。

6 平かな絵入往生要集

刊 半紙本三巻3冊 嘉永版 (京) 丁字屋九郎右衛門松會版

見返し題「嘉永/再刻 往生要集」、挿絵 八田華堂金彦。見返に「此書は恵心僧都の忍らみ給ひしをひらがな/に和らげ画をくわへしづの身尼入道迄/も讀安くして菩提道に入便ともならん」。序文の前に源信の肖像画を掲載、御詠歌をのせるなど、新しい試みが見られる。下巻末尾一丁半は蔵版目録。 志水文庫

空也

平安中期の僧で、踊念仏の祖。延喜3年(903)～天禄3年(972)。「弘也」^{こうや}とも。

出自は不明で一説に皇胤といわれるが、みずからの経歴や思想について書き残しておらず、その生涯は不明の部分が多い。若い頃から優婆塞(=在俗の修行者)^{うばそく}として諸国を巡歴し、二十歳あまりの時に尾張国分寺で得度し、空也と称した。遊行中は、修行のかたわらで、険しい道路を平らげ、橋を架け、井戸を掘り、荒野に死骸があれば火葬して南無阿弥陀仏の名号を唱えて葬ったという。絶えずこの名号を唱えていたので俗に阿弥陀聖といわれ、掘った井戸は阿弥陀井とよばれた。

天慶元年(938)京都に入り、町中を遊行して乞食し、布施を得れば貧者や病人に施したと伝える。人の集まる市門に立って、人々に念仏と浄土信仰を勧めたことから、市^{いち}聖^{のひじり}とも呼ばれた。市門には「極楽は遙けきほどと聞きしかどつとめて至る所なりけり(極楽は遙か遠い所だと聞いていたけれど、勤行すれば翌朝にも到達できる所だったよ。)」(『千載集』1201)と書きつけて、速疾^{そくしつ}往生を説いた。

天曆2年(948)比叡山に上り、天台座主の延昌^{えんしょう}について得度。光勝^{こうしょう}という僧名を受けたが、自らは空也を名乗った。浄土往生の念仏を勧める一方で、京都に疫病が流行すると空也は、天曆4年(950)人々から浄財を集めて、1丈の十一面観音像、6尺の梵天・帝釈・四天王の像を造立した。また金泥の『大般若経』一部600巻の書写を發願し、13年間かかって応和3年(963)に成就、賀茂川の東に西光寺(後の六波羅蜜寺)^{ろくはらみつじ}を建てて『大般若経』の書写供養を行った。この寺で空也は、天禄3年(972)9月11日に入滅した。

空也^{かね}は鉦を叩きながら念仏を高唱して人々を教化したが、京都の町の家の門に貼ったとされる「一たびも南無阿弥陀仏といふ人のはちすの上ののぼらぬはなし(一度でも南無阿弥陀仏と唱えた人が、極楽浄土の蓮の葉の上に上がらないことはない。誰でも往生できるはずだ。)」という歌は『拾遺集』にも収められた。また、囚人のために卒塔婆を建てて供養し(『打聞集』)、父母を亡くした幼児を慰め(『古今著聞集』)、病気を治し(『打聞集』『宇治拾遺物語』)、松尾明神に着古した小袖を脱いで与える(『發心集』)など、民間の宗教者としてのさまざまな姿が説話に残る。

空也の遊行時の様子は、絵画や彫刻に見られるように(*別掲「空也上人肖像」参照)、短い衣^{はぎだか}を脛高^{わらじ}に^{はぎだか}着て草鞋^{わらじ}を履き、胸に鉦鼓台^{しょうこ}をつけて鉦^{かね}を下^{かね}げ、手に撞木^{しゅもく}と鹿角杖^{わしかづえ}を持っていた。空也の意志を継ぐ遊行聖もこの姿で、彼らは阿弥陀聖とも鉦打とも鉢叩ともよばれ、各地に空也を祀る空也堂を建てて空也僧集団を形成した。

平安期以降、貴賤老若男女が念仏を唱えるようになったのは空也のお蔭とされ、東北地方を遊行して仏教を広めた功績は特に大きい。また、念仏を広める運動として踊念仏をしたので、後世、一遍と時衆の踊念仏も空也を祖とした。空也の伝承は、日本の民間信仰の諸要素をあわせそなえており、一遍をはじめとする民間布教僧に大きな影響を与えた。また、六波羅蜜寺は、空也念仏の中心として現代も多くの人々の信仰を集めている。



7 空也上人絵詞伝(展示7)より

7 空也上人絵詞伝

大本 1冊(上中下3巻合綴) 天明2年(1782)刊(序)

空也上人一代の行状を記す。序文によると、原本は尊証親王をはじめ公卿たちが筆を執り、海北友雪が絵を描いて上中下3巻をなして空也堂に秘蔵されたという。原本は存在しないが、上梓の天明2年(1782)以降は版本として広く流通したらしい。序文を信じるならば、作成者の生没年からおよその制作年は寛文～延宝期(1660～70年代)頃か。

本書では、空也は阿弥陀の垂迹^{すいじやく}※で、醍醐天皇の第二皇子として生まれたとされる。七歳で出家、もっぱら念仏弘通に努め会津で没した。生涯を通じて神仏と交流しつつ念仏を広めていく様子が語られるが、特に、加茂明神と松尾明神の託宣によって六斎念仏を創始することに重点がおかれる。両社の神勅は、念仏の元祖たる空也を象徴する記載として位置づけられており、六斎念仏が空也の開創という伝承の拠り所ともなっている。



7 空也上人絵詞伝
(松尾明神と空也、手前に六斎念仏の様子)

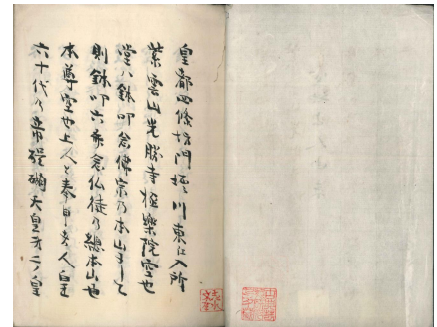
※垂迹…衆生を救うため、仏や菩薩が仮に神や人間などの姿となって現われること。 志水文庫

8 空也上人由来

写 半紙本 1冊 明治15年(1841) 貞阿弥

京都の極楽院(京都市中京区蛸薬師通にある天台宗の寺、紫雲山光勝寺)の空也堂の由来と、空也上人の伝記をまとめた書。刊記は「明治十五年三月三十日寫之」とする。

空也堂は空也が天慶年間(938～947)に開いたという。(平定盛が創建、空也を開山とし、自ら第二世になったとする。)本尊は空也自作と伝える空也上人像。毎年11月の開山忌には、歡喜踊躍念仏(空也踊)が修される。



8 空也上人由来

志水文庫

良忍

平安後期の比叡山の僧で融通念仏宗の開祖。延久5年(1073)～長承元年(1132)本願上人とも。尾州(愛知県)富田荘の領主の子。12歳で比叡山東塔の常行三昧堂の堂僧(不断念仏衆)となり、天台声明を学び、数々の修行をする。「良仁」の名を与えられたが、山の風紀の乱脈をみるに忍びず23歳で大原に隠遁し、名を「良忍」と改めた。

46歳のとき、良忍は夢に示現した阿弥陀仏から「一人一切人 一切人一人 一行一切行 一切行一行 是名他力往生 十界一念 融通念仏 億百万遍 功德円満」との偈を授かり、「一人往生をとげば、衆人も往生をとげむこと疑ひあるべからず」という啓示を受けたという(『融通念仏縁起』)。こうして、自他融通の他力念仏の行者となって、貴賤・道俗の勸化を目ざして全国を遍歴した。大治2年(1127)、摂津国(大阪府)住吉に修楽寺(後の大念仏寺)を建てて融通念仏宗の根本道場とした。長承元年(1132)大原の来迎院にて入滅(61歳)。後年に、聖応大

師の号を追諡された。

良忍はまた、比叡山で、第三代天台座主慈覚大師（円仁）が伝えた中国の声明（※経文に節をつけて詠唱する、いわば仏教音楽）を習得した。彼は産声が美しいことから「音徳丸」と名付けられたという美声の持ち主であった。隠遁の地に大原を選んだのは、天台声明の根本道場であったからであり、当時いくつかの流派に分かれていた天台声明を統一したことから、良忍は天台声明中興の祖とされている。

融通念仏について

「融通念仏」（古くは「ゆづう」とは、自らが称える念仏はあらゆる人に功德を融通し、逆に、他人が称える念仏の功德は自分に融通されるといふ念仏義をいう。

『法華経』による融通円頓（※円頓…滞りなく融通無礙の悟りの境地に達すること）および『華嚴経』の「一即一切 一切即一」の思想にもとづいて、『阿弥陀経』の「一心不乱執持名号」（※執持名号…名号を心に堅持して忘れないこと）の念仏を実践することにより、一人の念仏が一切人（すべての人）の念仏となり、一切人の念仏が一人のための念仏となるとするもので、念仏の数の功德性が強調され、自他ともに往生することを説く。

後に融通念仏宗の開祖とされる良忍は、永久5年（1117）、大原の来迎院で修行している最中に、阿弥陀仏から速疾往生の偈文（※前掲「良忍」参照）を直々に授かったと伝えられる。以後、良忍は自他の念仏が相互に融通し合って功德あることを説き、日課念仏を勧めるようになったとされる。

ここでいう「融通」とは、念仏はすべての者に融け合って障りがないという意味で、融通念仏宗では、念仏を唱えることで誰でも阿弥陀仏の住む極楽へ往生できると説く。良忍は、融通念仏によって、それまで貴族社会の専有物のように扱われていた仏教を、庶民にも広く開いたのである。

「融通念仏縁起」

融通念仏宗の宗祖良忍の伝記と、没後の奇蹟や念仏の功德等を描いた絵巻。正和3年（1314）頃に成立し、以後多数の伝本が制作された。

とりわけ本絵巻の伝播に尽力したのが良鎮^{りょうちん}※で、数十本の絵巻を勧進し、さらにこの絵巻を普及させるため木版化を企てた。木版本は明徳2年（1391）に完成、日本版画史上の記念碑的存在となった。以後近世後期にかけて、本絵巻の複数の版本が開版されている。

さらに良鎮は、明徳版本を底本とする肉筆の清凉寺本絵巻を勧進、詞書は後小松天皇や將軍足利義持を始め当代の高僧貴顕が執筆、絵も宮廷絵所預^{えどころ}※を中心に、当代一流の六人の絵師が執筆した。この清凉寺本を模刻したのが享和版（展示9）である。

※良鎮…念仏房。保元2年（1157）～建長3年（1251）11月3日。念阿弥陀仏、良鎮、藤次入道ともいう。もとは比叡山の学僧だったが、法然の勸化によって念仏聖となったという。法然滅後に夢告を得たとも伝える。嵯峨の往生院（現・祇王寺）に居住した。

※絵所預^{えどころあずかり}…平安時代、宮中の絵所の全体を総轄した職。絵所^{えどころ}は、宮廷の屏風や障子などの絵画制作にあたった公的機関。その長は別当といわれて五位の藏人が任じられ、預^{あずかり}はその下にあつて、専門の絵師が任命された。鎌倉時代には寺社に、室町・江戸時代には幕府にもそれぞれ絵所が置かれた。

9 融通念仏縁起絵巻

紙本墨擦 卷子本 2軸

箱表に「清涼寺本／融通念佛縁起（文化文政中模刻／田中畔道）二巻」と墨書。嵯峨清涼寺蔵の応永書写本により、享和年間頃に江戸で模刻された、享和版本の模刻か。

享和元年（1801）6月、江戸回向院において嵯峨清涼寺の本尊と清涼寺本「融通念仏縁起絵巻」（重文）等宝物の出開帳が行われた。その折、松平定信の命によって清涼寺本絵巻を模刻刊行せしめたものが本絵巻の享和版で、清涼寺本の卷子の大きさ等までことごとく模す。 志水文庫



9 融通念仏縁起絵巻（上巻）



10 融通大念仏縁起（上巻）

(9・10掲出箇所 上巻：良忍上人、阿弥陀如来より夢告を受ける／下巻：清涼寺で行われる融通念仏)



9 融通念仏縁起絵巻（下巻）



10 融通大念仏縁起（下巻）

10 融通大念仏縁起

刊 大本 二巻2冊 元禄5年（1692）（京）浅野久兵衛

融通念仏宗の由来や開祖良忍の伝記などを説いた書で、もともと元禄4年（1691）に、融通念仏宗総本山大念仏寺から版刻刊行された。本資料はその再版だが、扉題は元版と同じ元禄四年のまま。良忍の融通念仏感得の経緯、念仏の勧進、入滅後の奇跡譚、同宗の功德・利益などが描かれる。上巻巻頭に同寺四十六世融観ゆうかんの序文を載せる。なお本書の版木は現在も大念仏寺に保存されている。 志水文庫

法 然

浄土宗の開祖。長承2年(1133)～建暦2年(1212)諱は源空、法然は房号。美作国生まれ。久安元年(1145)に比叡山に登り、源光、皇円に師事し、久安3年(1147)戒壇院で受戒。その後、黒谷で叡空の教えを受け、法然房源空と称した。源信の『往生要集』の研究につとめ、そこに引かれた唐の善導の思想的影響によって、安元元年(1175)専修念仏の教えを確立し、比叡山をくだって東山大谷で浄土宗をひらく。

建久年間(1190～1199)から十余年の間に、初期浄土宗諸派の始祖となった証空、弁長、幸西、長西、隆寛らがあいついで入門、親鸞も建仁元年(1201)に弟子となった。法然は、弥陀の本願に絶対の帰信をよせ、称名の一行に徹するみずからの宗教的立場を浄土宗と名づけたという。

建久九年(1198)、公家の九条兼実の要請をうけて『選択本願念仏集』を著述する。これは弥陀・釈迦・諸仏が称名念仏のみを「選択」していることを示して、「専修念仏」の根拠の確立を目指した書物であった。この頃から法然は、念仏中に極楽のありさまが目の前に現れるという「三昧発得」の体験を持つようになった。

帰依者が増えるにつれて他宗からの法然教団批判が顕在化し、念仏が禁止される。承元元年(1207)、弟子の住蓮・安楽事件の責任で四国へ流されたが、のち許されて帰洛、翌建暦2年(1212)往生を遂げた。享年80歳。諡号は円光大師。通称は黒谷上人。

法然の教えと布教

法然は「専らに称名念仏を称えれば誰もが必ず往生できる」と説いた。いわゆる「専修念仏」で、それまでの仏教(浄土教も含む)が「行」中心の教えであったのに対して、「信」を重視した点に特色がある。ただし、同時に念仏の相続(続けること)も強く勧めており、決して「行」を軽視しているわけではない。一念でも往生できると信じて念仏を続けるべしというように、「信」と「行」の両方を重視したのである。

また、平安時代の仏教が基本的に、教え・行ともに雑修であったのに対し、法然は専修を説く。鎌倉仏教は総じて専修主義といえるが、そのあり方を最初に切り開いたのが法然であり、結果として日本仏教に大きな転換をもたらすこととなった。浄土教史上からは、それまで他宗に付随して信仰されていた浄土信仰を「浄土宗」として独立させたことも注目されよう。

布教対象は、従来は貴族や権力者に片寄りがちだったが、法然は武士や一般庶民、さらには一般女性まで分け隔てなく布教した。法然以前には稀であった和語による法語が多数見られようになるのも、こうした一般層に向けた布教と関わっている。また、郵便制度(駅路の法)の整備とあいまって、手紙での布教も頻繁に行っている。これも法然以前には非常に少なく、逆に法然以降は一般的な布教方法となっていく。法然は思想のみならず、布教面でも、日本仏教史上大きな革新をもたらしたのである。

11 法然上人絵伝

刊 掛物 1軸(上巻)

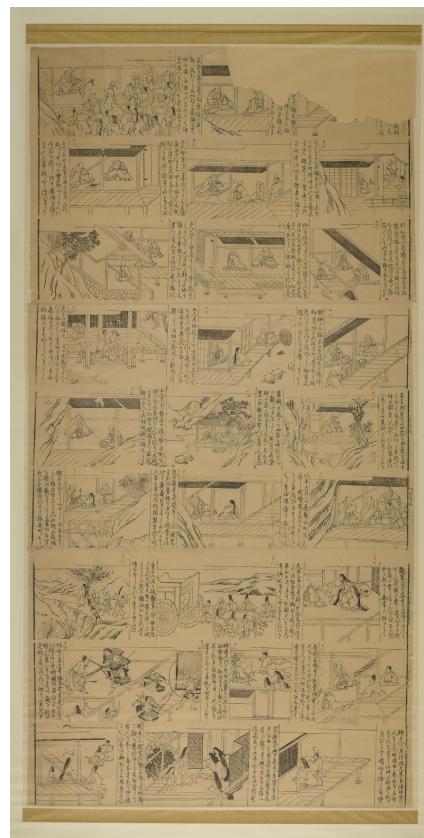
三紙継で、一紙に9場面、全27場面からなる。右下から左上へ進む。右欄外に「一ノ下ヨリ一」…「一ノ下ヨリ八」(最上の1段は右端が欠)。

14世紀前半成立の『法然上人行状画図』48巻を原初とする江戸期の絵伝から絵図と詞書を抽

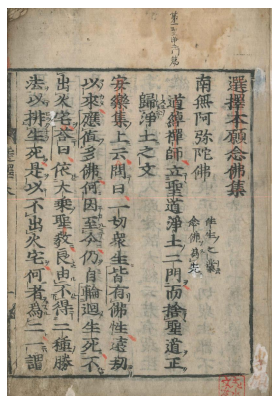
出・要約した刷り物。本軸は1～6巻に相当する。

1図. 仏神に祈って懐妊。／2図. 誕生。／3図. 幼少時に西を礼拝する癖あり／4図. 9歳で敵を射る。／5図. 父の遺言。／6図. 叔父観覚の元で学問。／7図. 観覚は比叡山に行くことを勧める。／8図. 上京の途中に藤原忠通と会う。／9図. 比叡山に登る。／10図. 持宝坊源光に師事。／11図. 阿闍梨皇円に師事。／12図. 受戒。／13図. 天台六十巻を読破。／14図. 黒谷叡空の室に入る。／15図. 叡空と円頓戒を論ず。／16図. 清涼寺参詣。／17図. 南都法相宗の蔵俊に对面。／18図. 醍醐寺で三論宗の寛雅より文函十余合を付属す。／19図. 仁和寺で華嚴宗の慶雅と对面。／20図. 御室御所の招請を辞す。／21図. 十住心義を論ず。／22図. 中川の実範より許可灌頂を授けらる。／23図. 叔父の観覚が弟子となる。／24図. 月輪殿(九条兼実)で山僧と参会。／25図(破損。内容は一切経を五返披見して善導『観無量寿経疏』に基く一向専修念仏に帰すことを決意する、承安5年(1175)の浄土宗開宗の場合)。／26図(一部破損). 慈眼房叡空と観仏・称名の優劣を論ず。／27図. 吉水の草庵で浄土の法門を人々に説く。

志水文庫



11 法然上人絵伝



12 選撰本願念仏集

12 選撰本願念仏集

刊 大本 二巻1冊 寛永8年(1631)(京)中嶋四良左衛門
略称『選撰集』(浄土真宗では「せんじゃくしゅう」)。法然撰。
建久9年(1198)成立。法然畢生の書にして、浄土宗の根本聖典とされる。一切衆生救済の仏道実践として、称名念仏が浄土往生の唯一にして絶対の行であることを明示した書。書名中の「選撰本願念仏」とは、阿弥陀仏が、あらゆる仏道修行の中から「選撰(取捨)」した結果、自身の極楽浄土に往生するための「本願」行として定めた称名「念仏」を指す。

志水文庫

13 〔法然上人行状略伝〕

刊 大本 1冊 文化15年(1818):序

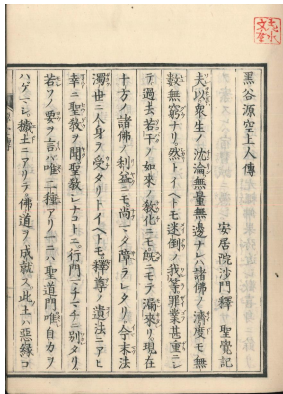
上下2巻のうち、本資料は下巻のみで初丁を欠く。現存する同版本の序では「洛京極 勝圓精舎 文化十五寅年二月廿五日 聲譽超道 謹記」とする。(本書跋文に「沙門聲譽謹誌」)。

法然の生涯における化導、また御利益について、諸伝説に漏れたところを補うべく作られたという。2巻に分ち詞と絵で記す。本書は寛文6年(1666)の絵詞『黒谷法然上人一代記』十巻10冊、同内容の宝暦8年(1758)刊『円光大師御伝記』5冊など、絵入法然上人伝の系譜の上に位置づけられる。



13 法然上人行状略伝

志水文庫



14 黒谷源空上人伝

14 黒谷源空上人伝

刊 大本 1冊 (京) 永田長左衛門

著者は聖覚(内題次行「安居院沙門釋 聖覺記」)。延宝4年(1676)菱屋亦兵衛・菱屋友七刊本の後刷。『十六門記』『黒谷上人伝』『上人伝記』『法然上人伝』ともいう。本書は詞書のみで、法然の一生および滅後の門弟による念仏弘通と、山門衆徒による法難に至るまでを16段に分けて記述する。なお、年代表記・記載事項に曖昧な点があり、現在は聖覚の作とすることは存疑とされている。

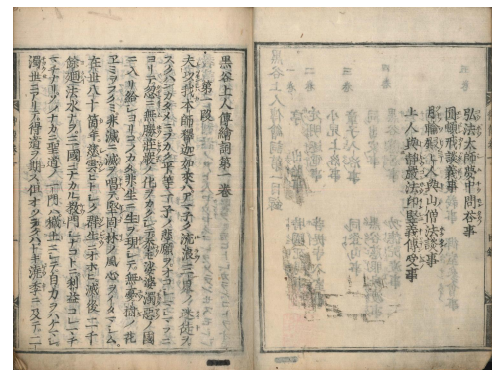
志水文庫

15 黒谷上人伝絵詞(第一～第十)

刊 大本 48巻10冊

寛永21年(1644) 五郎左衛門

『法然上人行状画図』とも。『法然上人行状画図』は絵入りの伝記で全48巻仕立てのものが多いが、本資料は絵入の上人伝の詞書だけを集めて、10冊に仕立てたものらしい。本書と同じ書名の10冊本は、寛永3年(1626)古活字版が最も古く、ほかに寛永13年版および本書と同じ21年版が確認されている。改題本に5冊仕立ての『円光大師御伝記』がある。



15 黒谷上人伝絵詞

志水文庫

親鸞

鎌倉初期の僧。浄土真宗の開祖。承安3年(1173)～弘長2年(1262)。

諡号は見真大師。はじめ綿空を称したが、これを善信と改め、親鸞と併用した。

治承5年(1181)青蓮院の慈円について出家、比叡山で修行をする。建仁元年(1201)29歳のとき、聖徳太子ゆかりの京都六角堂に百日の参籠、95日目の暁に救世観音(太子)が示現し、夢の告を得た。親鸞は、この告の意味を問い尋ねて、源空(法然)の門を叩き、その念仏の教えに心酔して弟子となった。門下では代表的人物となり、元久2年(1205)には源空の主著『選択本願念仏集』の書写と師の肖像の図画を許されている。

承元元年(1207)、一部の念仏僧の風紀問題に端を發し、法然以下数人が罪科に処せられ、親鸞も越後国国府(新潟県上越市)に流された。この地で恵信尼と結婚、親鸞の念仏の在家主義(肉食・妻帯を認める)が始まるが、配流の間は、僧でも俗でもない「非僧非俗」を標榜して「愚禿親鸞」と自称した。建暦元年(1211)11月流罪を許されたが帰洛せず、しばらくは東国で布教に努めた。

六十歳代で帰洛後は、『教行信証』の完成や師源空の法語の整理など、著述に専念する。晩年には嫡男善鸞の義絶などの事件に見舞われたが、「自然法爾」の一文を草し天衣無縫の自然の境界に浸ったことを語っている。弘長2年(1262)11月28日示寂。主著『教行信証』の他に和讃が五百数十首あり、『浄土和讃』『高僧和讃』『正像末和讃』に収める。

16 見真大師御絵伝

刊 掛物 1軸

親鸞伝絵は、『本願寺聖人親鸞伝絵』（康永本。東本願寺蔵）に基づく4幅本が室町中期以降に普及。本軸はそれを1軸に仕立てた刷り物。絵と詞書で全20場を描く。右下→右上→左下→左上の順で、それぞれ、下から上に進む。

右下1図. 承安3年（1173）、親鸞誕生。

2図. 9歳、青蓮院の慈鎮（慈円）のもとで出家。

3図. 29歳で比叡山を下り、源空（法然）を訪ねる。

4図. 建仁3年（1203）、六角堂で観音の夢告を受く。

5図. 弟子蓮位、聖徳太子が親鸞を礼拝する夢を見る。

右上6図. 法然から『選択集』の書写と御詠を許される。

7図. 法然は親鸞と同じく信不退の座に着いた。

8図. 法然の信心と同じと述べた親鸞を法然が認めた。

9図. 入西房の願いで、親鸞の御影を定禅に描かせる。

左下10図～12図. 承元（1207）の法難。

13図. 法然は土佐に、親鸞は越後に流罪となる。

14図. 親鸞は常陸に移り、稲田で人々の教えを弘めた。

15図. 親鸞を襲った山伏、親鸞に直面するなり帰依。

左上16図. 京に戻る親鸞を箱根で、神告を得た翁が饗応。

17図. 熊野詣の平太郎、権現が親鸞に敬服する夢見。

18図. 弘長2年（1262）、親鸞、90歳で往生する。

19図. 東山鳥辺野に埋葬し、遺骨を大谷に納める。

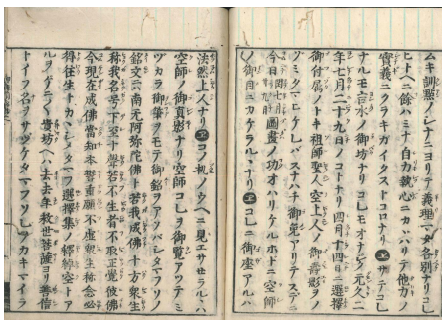
20図. 文永9年（1272）、大谷に廟堂を建立する。



16 見真大師御絵伝

志水文庫

17 御伝絵説詞略鈔



17 御伝絵説詞略抄

刊 大本 五卷5冊 宝永8年（1711） 井上七郎兵衛

御伝絵（親鸞聖人伝絵）の注釈書。各種の親鸞伝絵の作成に関与した康楽寺の記録類に基づき、康楽寺十二世浄念の末裔にあたる長命寺住職の霊勝が記した伝絵の解説書で、巻一・二に上巻の8段、巻三～五に下巻の7段の各画面について絵の内容を詳細に記す。版元の井上七郎兵衛は、正徳・享保期に韻書、仏書、史書などを出版した京都の本屋である。

康楽寺は、長野県の真宗寺院で、親鸞の弟子、西仏の草創という。西仏は、もとは木曾義仲の右筆だった大夫坊覚明で、後に法然・親鸞に帰依したとする説などがあり、謎の多い人物である。しかし、康楽寺の二代目住持であった画僧の浄賀（1275?～1356）は、親鸞（1173～1262）没後の永仁3年（1295）に親鸞曾孫の本願寺三世覚如の命で二卷本『善信上人絵』（散佚）を描き、浄賀の系統の絵仏師は康楽寺流と呼ばれた。

なお、『善信上人絵』の系統を受け継ぐのが西本願寺本『善信聖人絵（琳阿本）』で、浄賀の子孫 宗舜・円寂によって康永2年（1343）に描かれたのが東本願寺本『本願寺聖人伝絵（康永本）』。また、康楽寺には南北朝期に描かれた『本願寺聖人親鸞伝絵（康楽寺本）』が蔵されている。

志水文庫

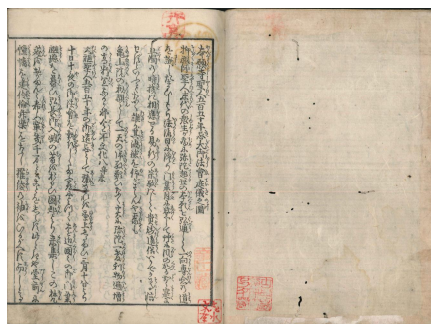
18～20（親鸞聖人の年忌法要庭儀之図）

西本願寺での親鸞聖人の年忌法要（五百回忌・五百五十回忌・六百回忌）の庭儀の図三種。

※「庭儀」…仏教行事で寺院の前庭など、屋外でも行われる儀礼。宗祖の遠忌会、落慶法要などの大規模で丁寧な法要に用いられ、多くの法要形式の中では最も重いものとされる。



18 本願寺聖人五百年忌大御法会庭儀之図



19 本願寺聖人五百五十年忌大御法会



20 大祖聖人六百回広大会

18 本願寺聖人五百年忌大御法会庭儀之図

刊 半紙本1冊 宝暦11年（1761）か（京）めどき屋勘兵衛
書名は内題による。刊者は、『通俗台湾軍談』（享保8年）の作者、上坂勘兵衛兼勝かその後裔で、上坂は寛文年間から出版を営み、著屋勘兵衛の名で天保年間まで活動した書肆。 志水文庫

19 本願寺聖人五百五十年忌大御法会庭儀之図

刊 半紙本1冊 文化7年（1810）（京）永田調兵衛他
書名は内題による。外題は「大祖聖人／半千半百大御法会庭儀図」（単梓刷題）。 志水文庫

20 大祖聖人六百回広大会庭儀図

刊 半紙本1冊 万延元年（1860）丁子屋九郎右衛門
書名・刊者名は初丁の胡蝶楽演舞絵を施した扉題による。 志水文庫

わさん 和讃について

日本語による仏教讃歌の一種。インドの「梵讃」、中国の「漢讃」に対し、和語による讃歌という意味で名づけられた。内容は、仏・菩薩の功德や教法、高僧などの教えや行跡を褒め称えたもので、形式は、七五調四句を一連として構成される。ちなみに、「御詠歌」も和讃の流れを組んでいるものだが、和讃が七五調であるのに対して、御詠歌は和歌と同じ形式（五・七・五・七・七）をとる点が異なる。

法会や教化にあたって曲調をつけて詠じるもので、一般的には平安時代から流行した。日本における仏教の普及、大衆の教法理解に、和讃は大きな役割を果たした。『扶桑略記』抜粹に行基の仏法讃嘆を記しているが、それによって和讃の機能が理解できる。

古い和讃として、行基作と伝える『法華讃歎』、光明皇后作と伝える『百石讃歎』、円仁作と伝える『舎利讃歎』があるが、真偽のほどは不明。その後、千観の『弥陀和讃』、良源の『本覚讃』、源信の『極楽六時讃』が作られるなど、鎌倉時代以降、撰者名を仮託した和讃をも含めると実に多くの和讃がつくられ流布した。そのうち、親鸞作の浄土・高僧・正像末の『三帖和讃』と『太子和讃』、一遍作の『別願和讃』は有名。和讃は宗教的な意味だけでなく、文学史的な観点からは今様との関係も深く、重要である。

※今様…平安時代中期から鎌倉時代にかけて宮廷で流行した歌謡「今様歌」の略。今様は当世風の意。

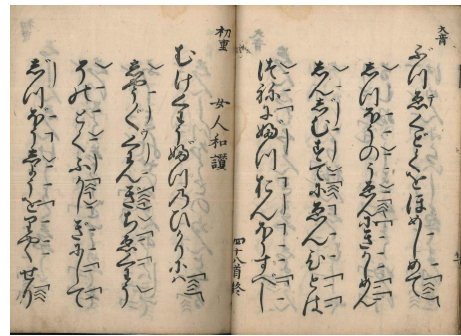
21 四十八首並女人御和讃

刊 半紙本 1冊

元禄2年(1689)

(京)松葉軒

親鸞作の『浄土和讃』から、「四十八首」と「女人和讃」を載せる。『浄土和讃』は阿弥陀如来とその浄土の徳を讃嘆したもので、冠頭讃2首・讃阿弥陀仏偈讃48首・大経讃22首のほか、観経讃・弥陀経讃・諸経讃・現世利益讃・勢至讃の計118首からなる。本書前半は、「讃阿弥陀仏偈和讃」48首のうち7首目以降。始めの6首は、日々の勤行で「正信念仏偈」(※親鸞の『教行信証』巻末の偈文)と併せて読誦されるため広く知られている。「女人和讃」は、大経讃の7首目以降の6首、女人往生を説く部分。 志水文庫

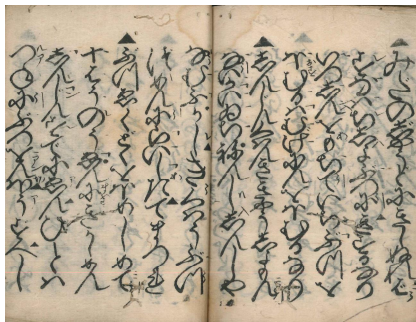


21 四十八首並女人御和讃

22 念仏御和讃

刊 小本 1冊

(大坂)柏原屋清右衛門



22 念仏御和讃

親鸞作の念仏和讃を、初心者向けにひらかなで刊行した書。「念仏和讃」とは、『浄土和讃』のうち讃阿弥陀仏偈讃48首(展示21参照)のことで、本書は、最もよく引かれる冒頭6首も含め、全首を所収。巻頭に「改悔文」、続く2丁分に「本願寺御代之次第」(本願寺の代々)を載せる。改悔文(頌解文とも)は、蓮如筆で、自力を捨てて阿弥陀の本願をたのみ、報謝の称名を唱え、宗規を守ることを述べたもの。 志水文庫

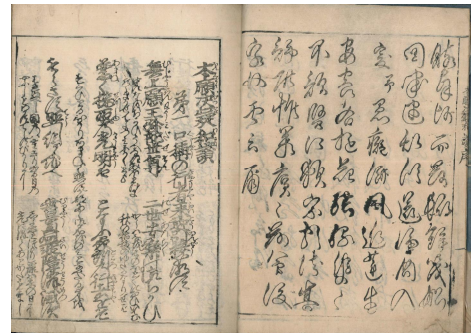
志水文庫

23 本願決疑和讃

刊 半紙本 1冊

宝暦4年(1754)(跋)

阿弥陀の本願についての疑問を解決すべく、「～を明らかにす」とわかりやすく説く和讃。「第一 口称の行者来迎引接を明にす」、以下、第二「浄家所立の心行を～」、第三「顕密両家の起行不二を…」、第四「願主の大悲甚深を略して…」、第五「厭捨娑婆求仏国を…」、第六「無常迅速なるを…」の6首。著者の 跋に名のみえる著者の法忍(別名を浄業)については未詳ながら、同じ年に『傍詠本願和讃』も刊行されている。 志水文庫

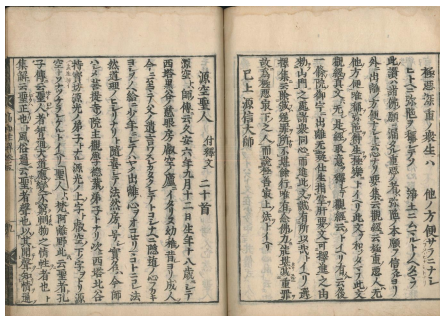


23 本願決疑和讃

24 高僧和讃註解

刊 大本 1冊 (七巻2冊を合綴)

江戸の本願寺派妙延寺二世である空誓(1603~1693)が著した、『高僧和讃(浄土高僧和讃)』の注釈書。



24 高僧和讃註解

『高僧和讃』は、親鸞の和讃三部作(「浄土和讃」「正像末和讃」と併せて総称『三帖和讃』)の一つで、宝治2年(1248)頃の作とされる。親鸞が定めた浄土七高僧(龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・源空)を称える和讃117首と跋の讃2首から成る。内容は、阿弥陀仏の本願への信心と念仏こそが往生の正因であると強調する。七高僧は本願念仏をあきらかにした祖師であるとする親鸞の基本姿勢を窺うことができる。 志水文庫

志水文庫

一 遍

時宗の開祖。勅諡号が円照大師(1886)、証誠大師(1940)。

伊予(愛媛県)の豪族河野七郎通広(?~1263)の子。10歳で母を亡くし、出家して随縁と名のつた。14歳で大宰府の浄土宗西山流の僧聖達(生没年不詳)の門をたたき、肥前の華台に浄土宗の教学を学び、名を智真と改めた。25歳で父が死去し還俗するが、再出家。33歳の春、信濃の善光寺に参詣し、専修念仏の行に入った。

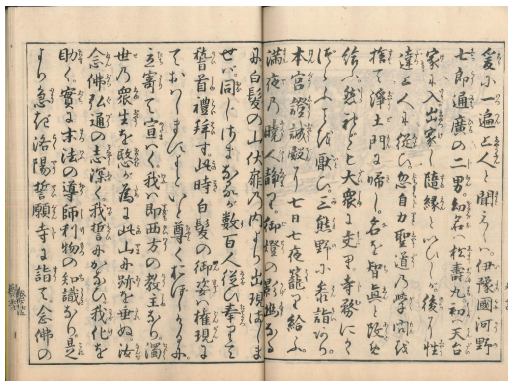
その後、熊野に参籠し、阿弥陀仏を本地とする熊野権現の神託を受けた。神託によって智真は衆生の信不信、浄不浄の区別にこだわることのない念仏勸化の実践に確信を得、やがて新宮で「六字名号一遍法」で始まる六十万人偈を感得して名を「一遍」と改め、「南無阿弥陀仏 決定往生六十万人」と記した念仏算(念仏勸化の札)を賦る賦算の旅(遊行)を始める。一遍は止住する寺をもたず、少数の弟子を同伴して全国各地を遊行したので「遊行上人」(一世)とも「捨聖」ともいわれた。

行く先々で民衆に念仏を勧め、所によってそれは踊念仏にまで高揚することもあった。正応2年(1289)8月23日、遊行の途次、兵庫和田岬の観音堂において51歳で往生。現在、神戸市兵庫区真光寺に一遍の墓がある。

一遍は臨終直前に所持の書籍などすべてを焼却しており、著作は残っていない。後人の手で『一遍聖絵』『一遍上人絵伝』などの伝記と、二、三の『法語集』が編集された。

25 絵詞要略 誓願寺縁起

刊 大本 二巻2冊 誓願寺版



25 絵詞要略 誓願寺縁起

慧明著、絵師は東洲。跋は寛政4年8月刊とするが、本資料は明治以降の版か。誓願寺は幾度も焼失し再建を余儀なくされたが、その度に「誓願寺縁起」が制作され寄付を募った。そのため縁起も、掛軸、絵巻物、冊子など多くの種類が残されている。

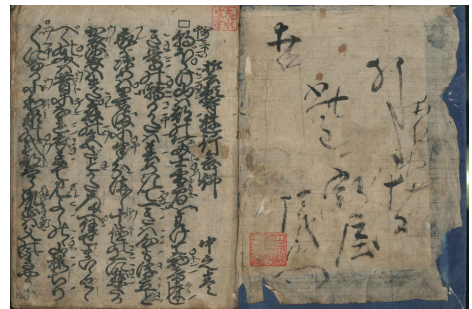
開基は天智天皇、開山は恵隠僧都。阿弥陀如来の出現や創建の由来のほか、和泉式部が夢の告を受けたことや源信が当寺にて善財講を修したこと、そして一遍上人も念仏賦算を行なったことなど、さまざまな逸話を載せる。

志水文庫

26 誓願寺遊行念仏

刊 半紙本 1冊 (京)山本九兵衛

浄瑠璃、宇治加賀掾正本。(奥書)「右此本者依小子之懇望附秘蜜音節自遂校合令開版者也/加賀掾(印)」。一面7行、18丁。丁付は「遊壺」~「遊十七」、18丁目は裁断で不明。内題下に「中之巻」とあり、本来は三巻物か。(大東急記念文庫蔵本・早稲田大学演劇博物館蔵も同様、ただし演博本には加賀掾の奥書を欠く。)丁付が「遊壺」から始まることから、景事(※曲節中心の叙景的な部分、節事)が独立して出版されたものと考えられる。刊年は不明ながら加賀掾の歿後間もない正徳年間(1711~1716)か。



26 誓願寺遊行念仏

志水文庫

念仏と芸能

多くの人々の支持された念仏や念仏往生の思想は、古典芸能の世界にもまた大きな影響を及ぼした。歌舞伎の創始についても、近世の初めに^{出雲大社の巫女}と伝えられる阿国が、この頃に民衆の間に行き渡っていた念仏踊に歌を交えて踊ったのが始まりと言われている。以下、能・浄瑠璃のうち、念仏に係わりのある作品をいくつか紹介しよう。

《誓願寺》 三番目物 五流現行

シテ（前）：都の女 シテ（後）：和泉式部の靈 ワキ：一遍上人 ワキツレ：従僧
アイ：所の者

[あらすじ]

六十万人^{げつじょう}決定往生の札を誓願寺で広める一遍に、六十万人の四字を不審した女は、寺額を一遍直筆の六字名号に換えんと本尊の告げを伝え、和泉式部の靈と名乗り姿を消す。一遍が額を換えるや、式部が歌舞の菩薩と現れ、弥陀の請願を称えて舞を舞い、額を拝する。

《百万》 四番目物 五流現行

シテ：百万（狂女） 子方：百万の子 ワキ：男 アイ：所の者

[あらすじ]

嵯峨清涼寺大念仏の音頭をとる狂女は、行方知れずの我が子を捜す奈良の女^{くせまい}曲舞百万で、法楽の舞を奏で清涼寺釈迦牟尼仏に祈請すると、見物の中から我が子が名乗り出、再会を果たす。

《隅田川》 四番目物 五流現行

シテ：梅若丸の母（狂女） 子方：梅若丸 ワキ：渡し守の男 ワキツレ：旅の男

[あらすじ]

拐^{かどわ}かされた子を尋ねる都の女物^{ものぐるい}狂が隅田川の岸に着き、船頭と応酬の末、乗船する。船頭の物語に我が子の死を知った女は、嘆きつつも鉦鼓を鳴らし念仏供養すると、幻に亡者が現れ、言葉を交わす。

《愛宕空也》 五番目物 （喜多流参考曲）

シテ（前）：老人 シテ（後）：竜神 ワキ：空也上人 アイ：能力

[あらすじ]

空也が愛宕山に登山すると、竜神が老人の姿で法華経聴聞に現れ、仏舍利を乞う。舍利を得た竜神は、報恩に愛宕山に清水を出す。

《融通鞍馬》 五番目物

シテ（前）：里人 シテ（後）：多聞天 ワキ：良忍上人

[あらすじ]

結縁のため良忍上人を鞍馬寺に案内した男は、やがて毘沙門天王と現じ、天照大神以下、大小神祇の結縁記帳した名帳を上人に捧げ、融通念仏擁護を誓う。「鞍馬詣」とも。

27 近世初期写上掛節付紺地金銀泥絵表紙一番綴謡本 「誓願寺」

写 中本 綴葉装 1冊

江戸初期筆の一番綴帖装本。本書のほか12冊（安達か原・梅かえ・花月・通小町・志賀・卒都婆小町・張良・天鼓・野の宮・白楽天・みちもり・頼まさ）の完本と、欠丁のある10冊（うち表紙付き5冊）がある。

紺表紙には、曲の内容にちなんだ金銀泥絵が描かれる。節漬付けは上掛り。慶長・元和頃の筆か。戦国期から江戸初期の筆写謡本には、本資料のように金銀泥絵の紺表紙を付すものが多い。

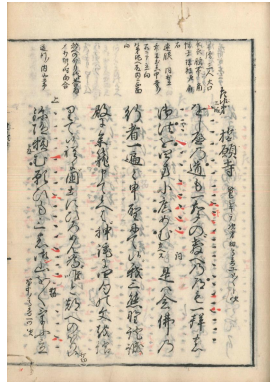


27近世初期写上掛系節付金銀泥絵表紙一番綴謡本

伊藤正義文庫

28 万治元年刊下掛系謡本（七太夫仕舞付）「放生川・安宅・誓願寺・邯鄲・舍利」

刊 大本 1冊 万治元年（1658）（京）林和泉



28 万治元年刊下掛系謡本

奥付に刊年・刊者を明記した、最初の下掛り版本。曲名題簽のほか「仕舞付百番 七太夫流」と外題があり、「七太夫仕舞付」と通称される。間拍子や離子の手を本文の左右に、型付・装束付を上部の空欄に、作物図・間狂言文句・離子の心得等を各曲の前付（又は後付）に記すなど、他に例のない詳細な附載をもつ謡本。喜多流大夫「七太夫」の名を付すが、内容は万治以前の諸刊本からの借用で、喜多流公認とは考え難い。多彩な内容を持つにも係わらず、本書は江戸末期まで再版されなかった。

伊藤正義文庫

29 堀池宗叱識語本「百万・檜垣」

写 中本 折本1冊（全47冊・94曲）

折本仕立で両面に一番ずつ収める。折本の表裏がともに表紙となる、謡本には珍しい装丁。表紙には紺地に金銀泥で曲に因んだ景物や人物が描かれ、左肩に金銀泥草花絵入り朱題簽あるいは朱無地題簽が貼られる。本資料「百万」の表紙は題箋2種を並べ、横に題箋筆者についての極めを貼る。題簽は、前者が近衛龍山筆、後者が後奈良院皇子の曼殊院覚怒親王筆と認められる。



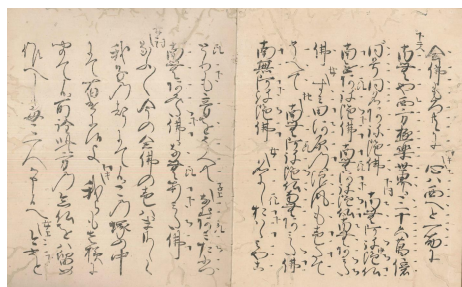
29 堀池宗叱識語本「百万」

94曲中23曲に、「堀池宗叱(花押)」の署名がある。宗叱は、堀池宗活の父、堀池次介忠清。永禄から文禄期に活躍した京都の手猿楽者(素人の能役者)で、茶道も堪能であった。 伊藤正義文庫

30 元和六年卯月刊観世流謡本「隅田川」

刊 半紙本 綴葉装 1冊 元和6年（1620） 石田少

左衛門



30 元和卯月本「隅田川」

元和6年卯月（4月）の観世大夫の奥付があり、「元和卯月本」と通称される。刊期を明記した最初の謡本であり、観世大夫の関与が明白な、観世流では初めての整版謡本。曲の内容に因んだ金泥絵入り紺表紙。ただし絵柄は伝本により異なっている。

本文書体は近衛流の達筆という豪華な装幀で、光悦謡本帖装本とともに版行謡本の双壁とされる。各冊に、「右百番之本者我等直／伝石田少左衛門章句付／依決板起猶以令清書／加奥書畢／元和六年卯月日／觀世左近大夫暮閑(花押)」という暮閑自筆を版下にしたと見られる奥付があり、高弟の石田少左衛門友雪が章句(節付)を加え、暮閑の校閲(※奥付識語の「清書」は校閲・加筆の意)を経て刊行した旨が記される。

詞章は、暮閑の時代、慶長期以来に進行した観世流謡曲詞章の改訂最終形態ともいべき内容で、天正末年頃の写本の詞章とはかなり異なる。大夫公認本ゆえに權威を認められたらしく、本書の詞章はほぼそのまま寛永卯月本に踏襲され、江戸前期に版行された観世流謡本の多くは観世黒雪章句の正本によったことをうたっている。

伊藤正義文庫

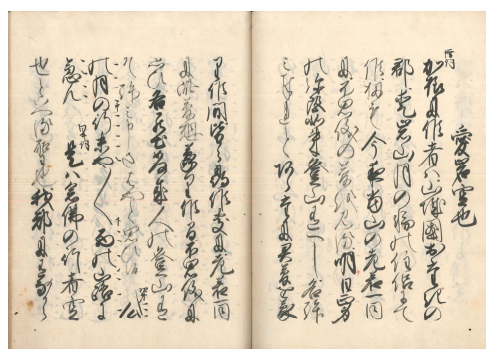
31 江戸期写上掛五百番謡本「七夕・烏帽子折・綾鼓・粉川寺・愛宕空也」

写 半紙本 1冊 (全100冊)

本資料は、長浜の旧家である吉田家に伝わった、五百番揃の五番綴謡本のうちの1冊。同じ装幀の「式三番」1冊・「謡目録」1冊・「謡名寄」上下2冊と併せられている。

本文は「福王流五百番謡本」(法政大学能楽研究所蔵)と同系で、本文・節ともに観世流とほぼ同じ。福王流は江戸時代は観世座付のワキ方で、素謡の教授に力を注ぎ、番外曲(定番曲以外で上演が稀なもの)まで入れて総数800番以上の曲数を伝えていた。

吉田文庫

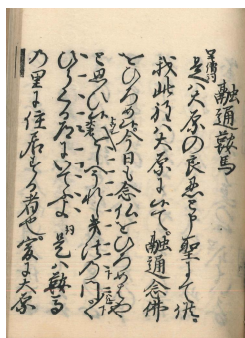


31 江戸期写上掛五百番謡本「愛宕空也」

32 田安家旧蔵 版本番外謡曲集(三百番)「大蛇・維盛・吉野天人・融通鞍馬・河水」

刊 小本 1冊 (五番綴、全20冊)

貞享3年(1686) (京) 林和泉掾



32 三百番謡本

定番の二百番(内組・外組)には含まれない、番外の100番を収めた謡本。当時の將軍綱吉および時代家宣の稀曲好みが謡本に反映したと言われている。節付法やその精粗が、曲によって異なる点が特徴。本資料を含む通称「三百番本」の後まもなく、さらに百番が追加して刊行された(四百番本)。本資料は田安家(八代將軍徳川吉宗の次男を祖とする御三卿の一家)旧蔵の善本。

志水文庫

33 都名所図会(卷之二)

刊 大本 1冊 [天明6年(1786)]

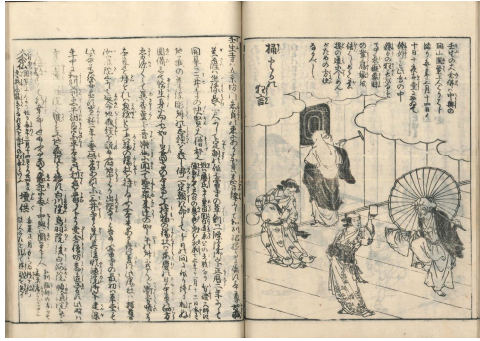
『都名所図会』は、各種の名所図会の先魁となったものである。本書は本文を京都の俳諧師秋里籬島が著し、図版を大坂の絵師竹原春朝齋が描き、京都の書肆吉野屋から安永9(1780)年に全六巻6冊で刊行された。(本資料は天明6年(1786)の再版本。) ※掲出箇所は「空也堂／空也踊」

江崎家旧蔵資料



33 都名所図会

34 拾遺 都名所図会 (巻二)



34 拾遺都名所図会
※掲出個所は「壬生大念仏の狂言」

刊 大本 1冊 天明7年(1787)

(大坂) 河内屋太助ほか2軒

全四巻5冊構成。『拾遺都名所図会』は『都名所図会』の後編として天明7年(1787)秋に刊行されたもので、前編と同じく著者は京都の俳諧師秋里籬島、挿絵は大坂の絵師竹原春朝齋が担当した。なお、この拾遺編は江戸でも同時に刊行された。

江崎家旧蔵資料

喜多文庫民俗芸能資料より

(撮影：喜多慶治)

39 歓喜跳躍念仏 (空也踊)

空也堂、昭和38年11月13日撮影



40 壬生大念仏狂言

壬生寺、昭和43年4月28日撮影



41 郡の空也念仏

念仏寺、昭和42年8月24日撮影



大阪音楽大学旧蔵「二世鶴澤清八浄瑠璃本コレクション」について

古典芸能研究センターでは昨年度、大阪音楽大学より「鶴澤清八浄瑠璃本コレクション」を受け入れた。本コレクションは、浄瑠璃の三味線奏者である二世 鶴澤清八氏（1879～1970）旧蔵の浄瑠璃関係資料、総計1601件からなる。内訳は、丸本282点、段物集8点、稽古本1184点、床本75点、三味線譜本154点、浄瑠璃関係書46点、番付227点、他流浄瑠璃26点で、そのうち、丸本と番付については、『義太夫年表近世篇別巻 索引篇』『正本所在目録』および「番付写真提供者総覧」において、大阪音楽大学所蔵本としてすでに広く公開されている。その他についても、大阪音楽大学音楽博物館の年報に目録が掲載されている。（※監修井野辺潔、編集網干毅・岩堀智美・株本真理、学術協力山田智恵子「二世鶴澤清八浄瑠璃本コレクション目録」『音楽研究 大阪音楽大学音楽博物館年報』第19巻、2003年7月）。

二世鶴澤清八（本名奥田徳松）は、明治12年（1879）大阪に生まれ、明治23年（1890）三世鶴澤清六（当時三世鶴太郎）に入門した。初名を二世鶴五郎といい、明治32年（1899）に四世鶴太郎を襲名した。大正2年（1913）には四世鶴澤叶を、さらに昭和17年（1942）二世鶴澤清八を襲名した。師の三世清六は、文楽系、非文楽系両方に通じた名人であり、山城少掾の相三味線として彼の芸を大成させたことでも知られている。そうした師に明治時代に入門し、御霊文楽座に出勤していた清八は、明治期の名人たちの手を意欲的に吸収し、それらを几帳面に書き残している。

今回はコレクションの紹介かたがた、ごく一部を展示した。ふだんあまり目にするのでできないさまざまな三味線の譜本など、貴重な資料をご覧いただきたい。

35 「五十年忌歌念仏」ほか 三味線譜本

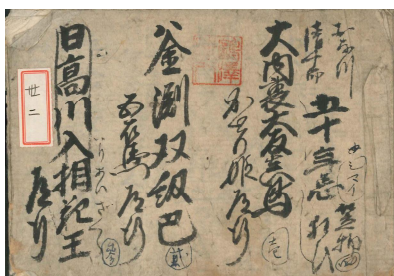
写 横本 1冊

「五十年忌歌念仏（お夏・清十郎五十年忌）」の笠物狂の段ほか、「大内裏大友真鳥」・「釜 澗 双級巴」・「日高川入相花王」の道行の部分の三味線譜本。三味線の演奏を伴う詞章だけを抜き出し、譜をつけたもの（稽古本の書き本）。

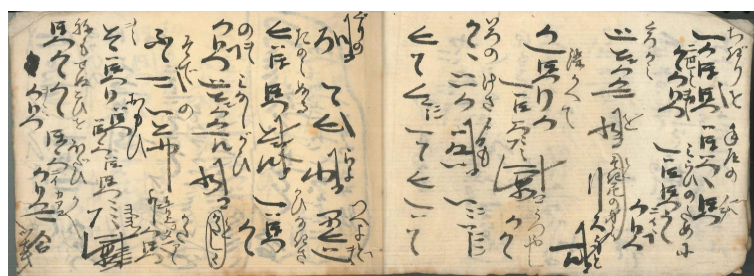
「五十年忌歌念仏」は、三巻、浄瑠璃。近松門左衛門作。宝永4年（1707）春、竹本座初演。角書「おなつ・清十郎」。題名は二人の追善のために舞台上で歌念仏を演じる意。寛文2年（1662）に起こった但馬屋の娘お夏と手代清十郎の密通事件を素材とする作品。この事件は、西鶴の『好色五人女』（貞享2年 [1685]）に描かれ、元禄期には歌舞伎で3度上演された。

大阪音楽大学旧蔵「二世鶴澤清八浄瑠璃本コレクション」

※この種の資料は、従来稽古本の一つとされていたが、目録化に際して、詞章の記し方から見て三味線の朱を付すことを主眼におくものを区別し、新たに「三味線譜本」という分類が立項されている。



35 「五十年忌歌念仏ほか」表紙



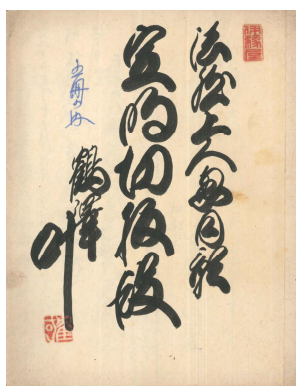
35 「五十年忌歌念仏ほか」

36 法然上人恵月影八段目 定明切腹

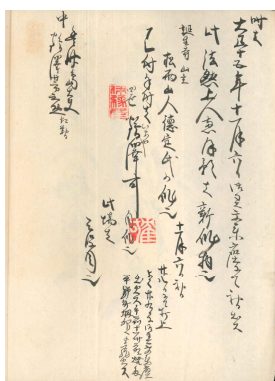
写 大本 1冊 鶴澤叶(筆写)

新作浄瑠璃「法然上人月影」の8段目「定明切腹段」抜本。本作は、大正15年(1926)11月6日より文楽座にて上演され人気を博した。台本は漆間徳^{うるまどくじょう}定作。開宗七百五十年にあたり『四十八卷伝』を骨子に法然の伝記を10段の題目にまとめた作品。鶴澤叶が手付けを記しており、巻末に「二見ヶ浦定秋切腹のだん二段共小生手付スル也」と記す。また、当時大阪市東区の御霊神社境内にあった文楽座が、この芝居の千秋楽翌日11月29日に全焼した旨も記す。

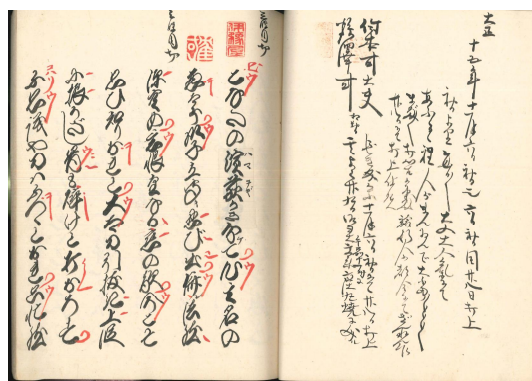
大阪音楽大学旧蔵「二世鶴澤清八浄瑠璃本コレクション」



36 「法然上人恵月影」表紙



36 (三段目中見返し)



36 (三段目切見返し／冒頭部分)

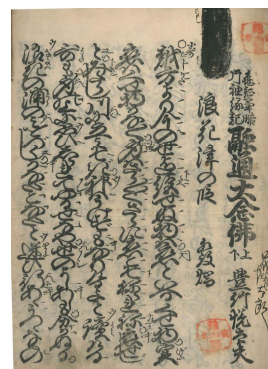
37 融通大念仏

刊 半紙本 1冊 文化8年(1811)初演

(大坂)玉置清七ほか

浄瑠璃丸本、一面7行、45丁。題簽は、角書「亀鉦事略片袖縁起」、書名下に「豊竹越前少掾相傳／本屋清七版」。内題下には「豊竹悦太夫」。刊記「文化八辛未年五月再板 作者 佐川藤太／添削 吉田新吾」。巻末に「由良湊千軒長者」と「融通大念仏」の役者役割の表を付す。

大阪音楽大学旧蔵「二世鶴澤清八浄瑠璃本コレクション」



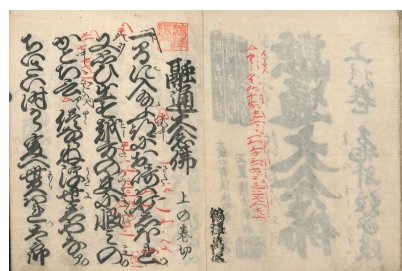
37 融通大念仏(冒頭)

38 融通大念仏(上の巻切)

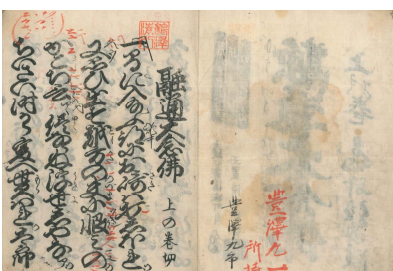
刊 半紙本 1冊／3種 文化8年(1811)初演 (大坂)玉置清七ほか

文化8年(1811)初演「融通大念仏」(展示37)上の巻切「亀井住家」の抜本。同じ刊本だが、三味線奏者3名の所持本。右から順に、①表紙「鶴澤吉左衛門」／見返し「鶴澤萬治」、②見返し墨書「豊澤九市一」／朱書「豊澤九一所持」／裏見返し朱書「豊澤九一所持」(別紙貼付け)、③表紙墨書「つる沢靄太郎」／見返し墨書「大隅太夫清六」・「大隅太郎所持」。朱書は旧蔵者二世鶴澤清八の手か。

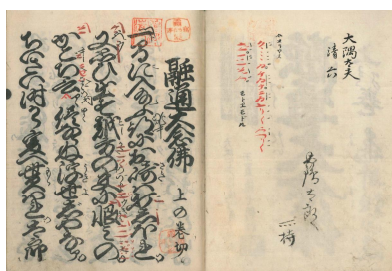
大阪音楽大学旧蔵「二世鶴澤清八浄瑠璃本コレクション」



38 「亀井住家」段(冒頭)①



38 「亀井住家」段(冒頭)②



38 「亀井住家」段(冒頭)③

「念仏往生 ～歓喜と報謝の表現～」展示図録

会場 神戸女子大学古典芸能研究センター展示室
期間 2023年9月25日（月）～11月30日（木）

編集 神戸女子大学古典芸能研究センター
（担当：非常勤研究員 大山範子）

〒650-0004 神戸市中央区中山手通2丁目23-1
神戸女子大学教育センター2階

